地域が変わる――　地域活性化の現場

日野

◎三方よし!近江日野田舎体験推進協議会 ▶ http://www.omi-hino.jp/

心がふれあう、あったかホームステイ。農村で味わう「近江日野田舎体験」が農村文化の見直しと、地域の浮揚力につながる

田舎の暮らしや生活文化に触れることで、都会では味わえないさまざまな体験を子どもたちにしてもらう。今、地域振興策の一つとして注目される「農山漁村体験」に取り組む地域が日野町をはじめ甲賀市、米原市、愛荘町など湖国でも増えている。なかでも、寝食を共にしながら、そこで暮らす人々の生活を体験してもらう「農村民泊」を柱にした日野町の取り組みは、体験者の満足度と同じくらい受入家庭の充実感を醸成する興味深いものだ。名づけて「三方よし!近江日野田舎体験」。

地域の家庭に修学旅行生が宿泊 人と人の心がつながる

心がふれあう、あったかホームステイ。こんなコンセプトによる「農村生活体験」が日野町に風を起こしている。「特別にもてなすのではなく、ありのままの“田舎の暮らし”を体験してもらい、人と人との温かいつながり、自然の恵みの尊さを都会の子どもたちに伝えたい」という思いに貫かれたグリーンツーリズムである。日野町で暮らす人々の家庭に修学旅行生たちがホームステイする「農村民泊」が柱だ。

例えば、2泊3日の修学旅行では1日目に京都や奈良を巡って、夕方には日野町へ。日野町の受入家庭は1軒につき3、4人ほどの生徒を自宅へ迎え入れる。田植えや草取り、稲刈りなど季節ごとの農作業を手伝ってもらったり、食事を一緒につくるなどして“心のつながり”を深めていく。他人の家に泊まる体験を通じて、生徒の多くは普段よりも表情豊かで積極的になるという。受入家庭の人たちの温かな人柄が心に響くのだろう。3日目の朝に日野町を離れる時には、涙を流す子も少なくない。受入家庭の皆さんもバスで帰路につく生徒たちに手を振りながら、思わずハンカチで目を拭う。

地域への誇りを取り戻すために 試行錯誤の末にみつけたもの

豊かな自然を生かし、「農村生活体験」に取り組む自治体は、群馬県南牧（なんもく）村や北海道置戸（おけと）町など全国にいくつかある。ツーリストを誘致することにウエートを置く地域が多いなかで、日野町の場合は「地域外の人との交流を通して、住民に“日野に住む誇り”を再認識してもらう」ことを特に重視している。

訪れた生徒と一緒に、「田んぼの草取り体験」

「農業は日野町の伝統的な基幹産業です。後継者不足、就農者の高齢化、耕作面積の減少、田畑や山林の荒廃といった農業を覆う“負の連鎖”は日野でも無縁ではなく、このままでは貴重な農村文化が消えていき、地域の活力が失われてしまう。こんな危機感が“農村生活体験”の出発点になりました」。こう話すのは、「三方よし!近江日野田舎体験推進協議会」事務局員で日野町商工観光課専門員の福本修一さんだ。

2004年3月に現在の協議会の前身となる「日野町グリーンツーリズム推進協議会」が設立され、当初はイベントを核にした地域振興に取り組んだ。しかし、イベントは一過性のもので終わってしまった。「新しい流れをつくるものは何か」。日野祭の曳山の引き手体験ツアー、日野菜の収穫・調理体験などの取り組みを続け、08年に「親子で農村民泊体験」を行った時に手応えを感じた。「一泊すれば交流が深まる」。

地域外との交流で気づく 農村暮らしの価値

県内や京都からやってきた体験者と受入家庭の満足度は期待以上に大きかった。田んぼに跳ねる蛙を見るだけで子どもたちは大はしゃぎ。その姿を見て、受入農家の人たちも平凡だと思っていた日野の風景が違ったものに見えるようになったという。「当たり前にやっていることに価値があると気づかされました。高齢者の二人暮らし家庭では、特に大きなやりがいを実感してもらえたようです」と福本さん。

食事は一緒につくって一緒に食べる

めったに経験できない「かまどのメシ炊き」

この農村民泊の結果に力づけられ、翌09年から修学旅行などの農村生活体験を本格的に受け入れするようになった。都会の人々と住民をつなぐコーディネーター役の協議会が、地域内の一般家庭を駆け回って協力を呼びかけた。初めはためらう住民も少なくなかったが、体験の受け入れを重ねて子どもたちとのつながりに充実感を味わう受入家庭が増えるにつれ、協力する家庭も次第に増加していった。

日野を愛する人たちの努力が実を結んで、首都圏からの修学旅行、近隣の京阪神からの野外活動を中心に小・中学校、高校の生徒たちを4年間で6,800人も受け入れることができた。

日野に暮らす喜びを 今後の地域振興に生かす

農村民泊を体験した子どもたちの満足度も高い。「他人の家に泊まることに不安もあったが、期待以上に楽しかった」「日野町は緑にあふれ、自然と人間の関わりの大切さを教えてくれた」。こんな評判が先生方の口コミで広がり、受入人数も年々増加している。

「受入人数2,950人、受入家庭数150軒という2012年度の実績は、安全・安心に、気持ちよく受け入れるうえで理想的な数字だと思います。子どもを受け入れ、育ててくださるのは地域の方々です。私たちの役目は子どもたちと地域の方々をつなぐこと。学校や旅行会社への誘致宣伝を重ね、この水準を今後とも維持したいですね」と福本さん。

日野に暮らす喜びを住民に再認識してもらいたい。その目標が達成されつつあることは、離村式で子どもたちを見送る時の受入家庭の皆さんの表情からもうかがえる。今後の課題はこれを観光・飲食施設などの地域経済振興にどう結びつけるかだ。協議会は教育旅行のさらなる発展とともに、「近江日野商人のふるさと」という観光資源を生かし近江商人の知恵に学ぶ企業研修旅行の誘致や、Uターン・Iターンの促進など新たな試みにも取り組もうとしている。

HINO